

【あとがき・解説】

高橋博子（たかはし・ひろこ／奈良大学教授）

狂気は個人にあつては稀有なことである。しかし、集団・党派・民族・時代にあつては通例である。

——フリードリヒ・ニーチェ『善悪の彼岸』（岩波書店、1970年）

ウクライナ戦争をきっかけに、日米両政府は東西冷戦時代に戻ったかのようです。軍事的な手段のみが解決に必要なかのような言説がメディアを覆い、「軍事評論家」の見解は拡散されますが、ウクライナ戦争に対する歴史的展望や考察はほとんど報道されません。今現在を切り取り、善悪二言論的説明で片付けられているのです。

そこでは、ロシアのウクライナ侵攻の問題は、アメリカのイラク戦争やヴェトナム戦争などとは全く別の次元の問題であり、ロシアの「核の威嚇」は、アメリカの核抑止論や日本の「核の傘」、原爆によって第二次世界大戦を勝利し、100万人を救ったとする「原爆勝利神話」、核の脅しによって冷戦に勝利したとする「冷戦勝利神話」とは違う問題なのです。

そして、アメリカの「核の傘」に守られているから日本は安全だとする日本の「核依存症」、さらに「ニュークリア・シェアリング」、「敵基地攻撃能力」、「防衛費GDP2パーセント」など、日本に対する警戒感を高め、インド・太平洋地域を「不自由で閉ざされた」地域にし、不安定にする言説・政策が溢れています。

そうした中でピーター・カズニック教授は、講演「核時代における平和と民主主義：日米の市民はウクライナ戦争から何を学び取るべきか」で、ドイツの哲学者のフリードリヒ・ニーチェの言葉、「狂気は個人にあつては稀なことだが、しかし集団、党派、民族、時代にあつては通例である」を紹介しつつ、戦争の狂気の時代について語りました。

また、アメリカおよび日本の軍事化を、歴史的展望から深く分析し、「平和的な解決を探っていくことができないのであれば、地球が抱えている他の世界規模の課題にも取り組むことができない、解決することもできない」とはっきりと述べました。

国家や時代が狂気に満ちている中で、カズニック教授の講演はその狂気に巻き込まれないための一筋の光のような講演です。多くの人々にカズニック教授のメッセージを受け取ってほしいと思います。

(2023年12月23日)